

作業中の手袋、使う派・使わない派？



まとめ（なぜ迷うのか）

- ・安全確保：手や皮膚を守るため
- ・作業性確保：触感や微調整を保つため
- ・品質維持：素材や製品への影響を抑えるため

この資料でわかること

- ・手袋の使用は一律ではなく、工程・作業内容・設備・素材・環境によって判断が分かれる
- ・一方で、「危険を避けるために着ける」「危険を避けるために外す」など、共通する考え方もある
- ・手袋の有無そのものより、「どの作業で、何を守るために、どこまで使うか」が重要になる

基本情報

- ・テーマ：作業中の手袋使用
- ・比較対象：繊維現場における「使う派・使わない派」の判断と使い分け
- ・対象範囲：紡績・織布・編立・染色など、工程特性の異なる現場
- ・情報収集方法：現場ヒアリング、運営による整理、既存の実務知見の再構成
- ・注意：本資料は一律の正解を示すものではなく、工程・作業内容・安全条件ごとの判断を比較するための記録です

用語定義

【手袋着用】

作業時に保護用として手袋をつけること。

常時着用・作業ごとの着脱・一部工程のみ着用を含む。

【素手作業】

手袋をつけず、直接手で素材や部品、製品に触れて行う作業。
触感や微調整が重視される場面で選ばれやすい。

【巻き込みリスク】

回転体や可動部に手袋や指先が引き込まれる危険性。
手袋の使用可否を左右する大きな判断材料になる。

共通点

- ・手袋の有無は好みではなく、「安全性・作業性・品質への影響」を踏まえて判断されている
- ・「常に使う」「常に使わない」ではなく、「作業ごとに使い分ける」考え方が多い
- ・手を守るだけでなく、「巻き込みや引っかかりを避ける」視点も重視されている

相違点

- ・回転体の近くで手袋を使うかどうか
- ・微調整や触感が必要な作業で素手を優先するかどうか
- ・薬剤・熱・汚れ・油を扱う場面で、どこまで着用を徹底するか

現場でよく見られた判断

基本的な考え方

- ・運搬や搬入時は着用する
- ・糸や生地に直接触れて調整する場面では外す
- ・薬剤や高温に触れる場面では着用を徹底する
- ・回転部に近い場面では着用を避ける、または種類を限定する

工程ごとに違いが出やすいポイント

紡績：糸くずや汚れ対応では使う場面がある一方、回転部周辺では素手または限定運用を選ぶことがある

織布：糸処理や機械調整では触感が重視され、常時着用より作業ごとの使い分けが多い

染色：薬剤・熱・水分・汚れから手を守るため、着用の必要性が高い

編立：繊細な作業では素手が選ばれやすい一方、油や汚れを伴う場面では着用することもある

必要時対応としての着脱

- ・搬送・掃除・交換作業では着用する
- ・製品確認や糸の扱いでは外す
- ・トラブル対応時だけ種類を変える
- ・汚れや薬剤への接触があるときだけ着用する

停止前後・切替時の判断

- ・機械停止後の清掃や部品交換では着用する
- ・色替えや液替えでは保護目的で着用する
- ・糸種や品種の切替時は触感確認のため外すことがある
- ・通常運転中は避けるが、停止中作業では使うことがある

現場で行われている“ならわし”

- ・回るところの近くでは、手袋はしない
- ・触って分からない作業は、結局うまくいかない
- ・汚れる作業は手袋、決める作業は素手
- ・危ないところは、まず外すか種類を見直す

なぜ判断が分かれるのか

手袋の使用は、「手を守るため」だけでは決まりません。

守りたいものと、失いたくない作業感覚の両方があるため、判断が分かります。

原料の違い：繊細な素材では、手袋の引っかかりや感触の鈍さを嫌って素手が選ばれることがある

設備の違い：回転体や可動部との距離、設備構造によって、安全上の考え方が変わる

環境の違い：温度、水分、油、薬剤、汚れの程度によって、着用の必要性が変わる

工程の違い：工程ごとに重視するリスクや作業性が異なる

稼働条件の違い：品種切替頻度、トラブル対応の多さ、作業者の経験差でも判断が変わる

活用の視点

現場で

- ・手袋使用ルールの見直し材料にする
- ・「安全のため」が逆に危険になっていないか確認する
- ・工程ごと・作業ごとの使い分けを検討する

教育機関で

- ・保護具の意味を「着ける・着けない」の二択ではなく、作業条件で考える教材にする
- ・安全と作業性の両立を考える授業素材にする
- ・現場判断が分かれる理由を学ぶ事例にする

行政・支援機関で

- ・現場改善や安全指導時のヒアリング視点として使う
- ・工程差を踏まえた安全教育資料のたたき台にする
- ・一律ルールでは拾いきれない現場差を把握する参考にする

判断のヒント

- その作業で守りたいのは、手か、素材か、作業精度か
- 手袋が保護になるのか、逆に危険を増やすのかを整理できているか
- 回転体や可動部の近くで巻き込みリスクがないか
- 触感や微調整が必要な作業で、手袋が支障になっていないか
- 薬剤・熱・油・汚れへの対策として着用が必要な場面を分けられているか
- 常時着用ではなく、作業ごとの着脱で対応した方が良い場面はないか

□今のルールが、工程や設備の特性に合っているか

判断のために

手袋の使用は、「着ける方が正しい」「着けない方が正しい」と一律に決められるものではありません。

重要なのは、どの作業で、どの危険や負担を避けるために、どこまで着用するのかを見極めることです。

本データは、複数の判断や考え方を前提条件ごとに整理したものです。

条件が異なれば、最適な選択も変わります。

あなたの現場では、どの判断が近いでしょうか。